

序 豊饒ほうじょうの「黒」

二十一世紀の幕開けとともに爆発的な進化を遂げはじめたAI技術によって、地球と人類の顔つきは一変した。AIは、日々、希望と絶望の双方を私たちに送りつけてくる。一方に、「永生」すら約束するかに見える超スマート社会が遠望され、他方、私たちの多くが、有無をいわさぬ二極化社会の矛盾に苦しんでいる。AIの支配に組みしかれた私たちは、はたして人生の主人公としての栄えあるステータスを維持できているのだろうか。

AIが後押ししてきたグローバル社会の矛盾は恐ろしく深い。そこでは過去のもろもろの規範が揺らぎ、真実と嘘うその境界もあやしくなって、それらを反転させることさえ可能であるかのような幻想に人々は陥っている。人類が長い歴史のなかで培ったヒューマニズムの思想も、正義の観念も、デモクラシーの理想も、根本から見直しを迫られるにいたった。ヒューマニズム(humanism)の語源は、「土」を意味するラテン語の「フムス(humus)」にあるが、ここにいたって「土(フムス)」たる慎みを失った私たちは、はたしてどこに向かおうとしているのか。革命や大戦といった例外的なカタストロフィをのぞけば、人間が個人としてこれほどに強大となり、逆にこれほどにも弱体化した時代は、ほかに類を見ない。

そしてここに新しい事態が加わる。新型コロナウイルスの登場。AIと新型コロナウイルスによる二重支配のもとで、私たちがいま、唯一ポジティブな視点をもちうるとすれば、それは、立ちどまるという選択肢を手にしたことにある。私たちは、折にふれて、運命とは何か、罪とは何か、生命とは何かといった根本的な問いかけに素直に耳を傾けるようになった。これらの問いは、コロナ禍が去れば同時に消え去るといった性質のものではなく、AIの支配が続くかぎり、あたかもスフィックスの問いのように執拗しつように私たちの前に立ちはだかることだろう。そもそも、何のための生命なのか。私たちは、どこに生きる糧を求めればよいのか。

人間が人間であるということ、それは、人間が、あらゆる事実、あらゆる感情の前にむきだしのままさらされている状態をいう。愛も憎しみも、安心も恐怖も、人生というドラマに欠かせない要素である。それらの前でひたすらのうちまわることとは、「土」すなわち「フムス」としての人間の宿命である。かりにそこに生命の意義が隠されているとしたら、十九世紀ロシアの作家フォードル・ドストエフスキーほど、「フムス」としての人間をなまなましく体現し、限なくその現実を描きだしてみせた作家はいない。

五十九年にわたるその生涯を見渡してみよう。謎に満ちた父親の死、死刑判決、流刑、癲癇てんかん、賭博癖とばくへき、数十年にわたる国家からの監視。たしかに、二十世紀が生み出した桁外れな悲劇に類する事件に遭遇することはなかった。戦争体験もない。たとえば、ルーレット賭博への熱中のように、みずから呼び招いた不幸もある。しかし、彼の人生に降りかかった不幸は、おおむね

運命的というべき、選択の余地のないものだった。小説を執筆するかたわら、借金地獄でのさまざまな苦闘を、彼はほとんど道化的ともいうべき言葉で書きつづった。何百枚にもおよぶ膨大な書簡群は、あたかもそれ自体、彼に降りかかった試練のきびしさを物語っているかのようである（彼が、終生、義人ヨブの物語に惹きつけられた理由がまさにそこにあった）。

ドストエフスキーは、まさに、いたいけな赤子のように無防備に、五十九年の人生を生きぬいたが、その苦難がもたらしたドラマの一つひとつを彼は生きる誇りとしていた。癲癇という持病さえ、高度に文学的なメタファーへと昇華されていった。いっさいの体裁を考えず、がむしゃらに生きぬくこと、その信念がなければ、とうてい文学という困難な営みに生涯をささげることとはなかったろう。そしてそうした彼の精神的な熱源となったのが、ほかでもない、みづからが抱える宿命の謎、人生の不思議さに対する、尽きることのない好奇心だったのだ。

一八三九年八月、謎の死を遂げた父親を思い返しながら、当時十七歳の彼は、兄ミハイルに宛てた手紙に書いている。

「人間は謎です。それは解き明かさなくてはなりません。もしも一生をかけてそれを解きつづけたとしても、時間を浪費したとはいえないでしょう。ぼくはこの謎と取り組んでいます。なぜかといえば、人間でありたいからです」

（一八三九年八月十六日）
この手紙は、作家としての彼の隠された出発点とも呼ぶべき重大な示唆に満ちている。そしてそれから四十年後、彼は、死を目前にして手帳に次のように書きつけた。

「私はなにも小さな子どものようにキリストを信じ、キリストの教えを説いているわけではない。私のホサナは大いなる懷疑の試練を経ているのだ」

〔手帳〕一八八〇（八二）

こうしてこの二つの文章を並べてみると、ドストエフスキーは、あたかも、不信から信仰へという予定調和的な道を歩みつづけた幸せな作家であるかのように見える。「ホサナ」とは、神への祈り、神への感謝を意味するが、キリスト教徒としての一見揺るぎない信仰の底では、懷疑と不信の炎がこうこうと燃えさかっていた。そうでなければ、彼の文学は、真の意味で彼自身の人生のテーマとはなりえず、また、世界文学の最高峰としての栄光を勝ちえることもなかっただろう。

なぜ、いま、ドストエフスキーなのだろうか。

ドストエフスキーが追求するのは、もっとも根本的な部分における人間らしさである。彼は、全体的なものに対する恐怖に引き裂かれている。いや、人間から人間的なものを奪いとうとするとする力に対して徹底して抵抗を示す。「わたしは、病的な人間だ」（『地下室の記録』）の宣言は、まさにドストエフスキーの人間宣言である。真の意味でのヒューマニズム、つまり人間主義とは、人間存在のありようの全面的な承認にある。『カラマーゾフの兄弟』のなかでドミートリイは言う。「いやあ、人間って広い、広すぎるくらいだ、だから俺はちっちゃくしてやりたい」と。そしてその人間の限らない広さを体現する言葉が、最終的に、「カラマーゾフ」という固有名詞に結実した。ちなみに、「カラマーゾフ」には、「黒く塗られた者」の意味がある。

では、なぜ、「黒」なのだろうか。怪訝^{けげん}に思われる読者も少なくないと思う。古代ギリシャ人にとって黒は、冥界のシンボルである。生けるものとの世界を切り離すステュクスの川には黒い水が流れていた。中世のペスト流行時、犠牲者の死は、「黒い死」と呼ばれた。他方、ロシア南部からウクライナに広がる肥沃な土壌は、「黒い大地」と名づけられている。現代絵画の父カジミール・マレーヴィチは、一枚の白いキャンバスに描かれた「黒い正方形」に、「すべての可能性の種子」を見た。

私自身のロシア体験に照らしていうなら、ロシアにおいて黒は特権的な意味を与えられている。春の訪れとともに雪に覆われた大地がよみがえるとき、最初にその兆しを告げるのが、「土」の黒さである。『カラマーゾフの兄弟』の主人公アレクセイ（アリョーシャ）に「大地を愛する」と叫ばせたドストエフスキーにとって、黒は、豊饒の証^{あかし}であり、作家は白に、むしろ死に通じる不吉な象徴性を見ていた。では、『カラマーゾフの兄弟』の最後で、アレクセイと十二人の少年たちが、「カラマーゾフ、万歳！」を叫んだとき、少年たちは、この「カラマーゾフ」に何を思い浮かべていたのだろうか。それこそは、「カラマーゾフ」という名前に託された人間の生命力そのものではなかったろうか。白の大地から黒の大地が顔をのぞかせるさまは、まさに、死んだ少年イリュージョンの復活のシンボルとしてもふさわしい。

最後にひと言、書き添えておこう。ドストエフスキーは、人生のさまざまな局面において、限界のともいえるなまなましい真実を手にいれた。それは、豊饒であるがゆえに不条理であり、

不条理であるがゆえに人間的な真実に満ちた「言葉」である。本書では、彼の数ある「言葉」から、現代に生きる私たちの関心から始めて魅力的と思われる「言葉」をぬきだし、その解説をほどこした。「言葉」よりも解釈が先行している部分も少なからずある。かりに純粹に「言葉」だけに出会いたいという読者は、それこそ、黒い太文字で記された「言葉」を拾い読みしていただけたら幸いである。そこから生まれる印象もまた、ドストエフスキー文学の読解に新たな地平を切り開いてくれることだろう。

目次

序 豊饒の「黒」

3

第一章 金、または鑄造された自由

20

はじめに

幸福の頂点／金や負債との闘争の産物

1 金——新しい神

貯蓄に一生をささげた「守銭奴」／蓄財という不条理な欲望

2 貧困と賭博

赤貧とは犯罪である／ロシア的な賭博／運命Ⅱ金の全能性をめぐる物語

3 現実と小説

明るく響く「断末魔の叫び」／「去勢」と「蓄財」

第二章

4 蓄財と蕩尽、または「三千ルーブル」の行方

『吝嗇の騎士』と『カラマーゾフの兄弟』／神の存在確認

サディズム、または支配の欲求

55

1 ロシア社会を蝕む病

2 鞭打つ快楽

3 「銃殺にすべきです！」

4 馴化

痛みの自覚／馴化にともなう否定と無関心

5 支配の欲求

第三章

苦痛を愛する、または「二二が四は死のはじまり」

75

1 危険な発見

マゾヒズム／帝政ロシアの若いエリートたち

第四章

他者の死を願望する

2 不合理ゆえにわれ……

「人間主義」のより純化されたかたち／地下室人の問い

3 個的感觉から文化的基層へ

4 自己犠牲の方へ

1 「人は正しい人の墮落と恥辱を愛する」

2 「人はだれの裁き手にもなりえない」

3 「彼女の死を待っている瞬間があります」

4 「墮罪の原因は、私だ」

性愛からの解放を求めて／他者の死を願望することの罪

5 罪の意識の不在

第五章 疚しさ

1 「悔い改める貴族」

「ポリフォニー」論の是非／ナロードニキ／
トルストイの心を蝕む「呵責」

2 「疚しさ」の欠如と「疚しさ」の起源

3 「疚しい良心」、またはニーチェ

犯罪は「宿命」である／最高度の負い目の感情

4 「疚しさ」から「愛」へ

第六章 美が世界を救う

1 美と倫理

「事実」は美の問題になりうるか／作曲家の心に生じた一瞬の「驕り」

2 マドンナの理想、ソドムの理想

美と信仰の本質／女性美の理想／戦いの舞台としての美の世界

3 ウラー！ クラサター（「美、万歳！」）

「美が世界を救う」／美の体現者と「醜」の化身

4 「黄金時代」と死

5 死と崇高、または「異端」の美

intermission 「神がなければ、すべては許される」

1 境界線上の妄執

神と人間の関係性／法からの逸脱をまぬがれるには／「ぼくらが神になった」

2 神は存在するか

実存的な選択としての信仰／分裂するロシアの精神世界／

揺れ動くイワンの無神論

第七章

3 「ベソフシチナ」とウオトカ

ロシア人とアルコールの関係／「神なき」世界におけるウオトカ

4 「神がなければ、すべては許される」

サルトルとドストエフスキー／カラマゾフの下劣な力

5 現代へのこだま タルコフスキーと「神の不在」

信仰は限りなく恋愛に似ている／イワンへの愛情と共感

6 神があれば、すべては許される？

7 日本の「ベソフシチナ」

山岳ベース事件とオウム真理教／秋葉原事件と相模原事件

「全世界が疫病の生贄となる運命にあった」

1 「顕微鏡レベルの微生物」

ラスコーリニコフの悪夢／ロシア人の精神性が生みだす帰結

第八章

夢想家、または「永遠のコキュ」

1 「夢想家」をめぐる問い

さまざまの夢想家／世俗的な欲望を共有しあう分身同士の葛藤／
強者の心理に寄り添う

2 「ぼくには、狂人になるプロジェクトが（……）」

3 失われた夢想、牙を剥く性

全存在を賭した激烈な感情のドラマ／作家の性の真実

2 「バタフライ効果」から「患者選別」へ

3 ロシアの災厄

手を加えることのできない現実／コレラ禍

4 コレラとニヒリズム

「コレラの発生源かつ温床」／二種類の悪霊

5 「悪夢」のあとに

第九章

不吉な道化たち

4 永遠の「コキユ（寝取られ夫）」たち

嫉妬という絶対的な感情／寝取る男たちの絶望

5 カラマーゾフの愛

「魂をぬかれる」状態／性の極意

1 「余計者」から「無用者」へ

プーシキンの見えざる怒り／無用者の系譜

2 「食客」としての道化

五人の「嘘つき」たち／道化性、道化心／カラマーゾフ家の「老いぼれ道化」

3 不吉な道化たち

4 「嘘は、真に通ず」

酔っ払いこそが善良な人間／真実とは何か

第十章 神がかりと分身

1 起源

病的なまでの多弁と驚くべき内向癖／新しいゴーゴリ

2 『分身』の文体と「分身」の身体

異様な熱気／悪魔との分身関係／

イワン・カラマゾフとスメルジャコフの関係／スタヴローギンの本性

3 佯狂、またはユロードストヴォ

4 佯狂者群像

民衆的意識に宿る「不浄な力」／佯狂者＝神がかり

第十一章 破壊者たち

1 『悪霊』の時代

専制と自由の共存／社会主義がはらむ暴力性

2 人神

アンチ・ニヒリスト／キリーロフの自家撞着

3 「民族というのは、神のからだです」

4 対立から和解へ

テロリズムの問題／『悪霊』と『未成年』／古き良きロシアを破壊する

第十二章

父殺し、または「平安だけがあらゆる偉大な力の……」

—
326

1 「父殺し」の原点

「殺意」の正体／「父殺し」の誕生

2 作家と皇帝

3 「保守」の理想

若い学生へのエール／近代化の主役に対する憎悪

4 「大審問官」のテーゼ

5 キリストか、文学か

ドストエフスキのプーシキン像／最晩年のドストエフスキー

6 「カラマーゾフ、万歳！」に隠された意味

あとがき

主要参考・引用文献一覧